

平成 29 年（2017 年）1 月 19 日

「JAIRO Cloud」を活用して極地研がデータジャーナル創刊 NII 開発の共用リポジトリサービス

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所（NII、所長：喜連川 優、東京都千代田区）が開発・運用している共用リポジトリサービス「JAIRO Cloud」^{(*)1}が、情報・システム研究機構 国立極地研究所が本日 1 月 19 日に創刊を発表した極域科学に関するデータジャーナル『Polar Data Journal』^{(*)2}のプラットフォーム構築に活用されています。同研究所によると、『Polar Data Journal』は国内初の学術機関によるデータジャーナルになります。

【オープンアクセスの流れと NII の取り組み（JAIRO Cloud の提供）】

欧米をはじめ世界規模で、公的な研究資金を用いた研究の成果について、広く社会からのアクセスや利用を可能にするオープンアクセスの義務化が進みつつあります。日本においても平成 27 年（2015 年）3 月に内閣府が公表したオープンサイエンスに関する報告書^{(*)3}は、論文のオープンアクセス推進や研究データの公開について言及しています。

NII は教育・研究機関などが知的生産物を収集・保存して発信するための電子アーカイブシステムである機関リポジトリの構築・運用や連携について、大学図書館などを支援してきました。JAIRO Cloud は独自に機関リポジトリの構築や運用が難しい教育・研究機関などに対して NII が提供している共用リポジトリサービスです。昨年末現在、国内で機関リポジトリを公開している 651 機関のうち、約 54% にあたる「354」の機関が JAIRO Cloud を利用しています。公開準備中や利用申請中の機関を合わせると、JAIRO Cloud 導入機関数は「469」となります。

JAIRO Cloud を利用して機関リポジトリを公開している国公立大学は全国で計 282 校（昨年末現在）にのぼります。また、JAIRO Cloud を利用して研究成果のオープンアクセスを統一的に進めている大学共同利用機関法人 人間文化研究機構は機構内の全 6 機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が「機構リポジトリ」を公開するなど、国公立の研究機関も JAIRO Cloud を活用して機関リポジトリを構築・

運用しています。さらに、国立高等専門学校や博物館、美術館などにも JAIRO Cloud の利用は広がっています。

国立極地研究所の『Polar Data Journal』創刊はオープンサイエンスに向けての分野を超えたデータ共有の取り組みであり、NII は今後もこうした取り組みを支援することで、日本の学術コミュニティにおけるオープンアクセスを推進していきます。

以上

〈メディアの皆様からのお問い合わせ先〉

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所

総務部企画課 広報チーム

TEL:03-4212-2164 E-mail : media@nii.ac.jp

(*1) JAIRO Cloud : NII が開発した機関リポジトリシステム「WEKO」をベースとしたオープンソースのクラウドサービス。「WEKO」はスワヒリ語で「貯蔵庫 (リポジトリ)」の意味。

(*2) Polar Data Journal : <https://pdr.repo.nii.ac.jp/>。データジャーナルは学術誌のうちデータ論文を中心に扱うジャーナル。南極・北極観測によって得られたデータを査読しオンライン公開することで、極域のデータをより確実に、使いやすい形で保存し提供していくことが目的。南極や北極など極域での実験や観測で得られたデータおよびそのデータに関する論文 (データ論文) について、所属や学術分野にかかわらず、広く国際的に投稿を受け付ける。詳細は国立極地研究所のプレスリリース「極域科学に関するデータジャーナル『Polar Data Journal』創刊」(<http://www.nipr.ac.jp/info/notice/20170119.html>) 参照。

(*3) 内閣府が公表したオープンサイエンスに関する報告書 : 「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」報告書 (<http://www8.cao.go.jp/cstp/sonota/openscience/index.html>)